

新刊紹介

著者	清水 建美, 綿野 泰行, 鈴木 三男, 里見 信生
著者別表示	Shimizu Tatemi, Watano Yasuyuki, Suzuki Mitsuo, Satomi Nobuo
雑誌名	植物地理・分類研究
巻	38
号	1
ページ	8p.
発行年	1990-06-25
URL	http://doi.org/10.24517/00055952



Sakae-mura, Shimizugawara-Mitama (M. MIZUSHIMA on 1 July 1956, MAK); Chiisagata-gun, Sanada-machi, Sanada-Kakuma (C. OHKAWA on 3 Aug. 1964, TNS).

We thank Mr. Kenji MIDORIKAWA for his help in field survey. We also appreciate the curators of the herbaria of Kyoto University (KYO), National Science Museum, Tokyo (TNS), Makino Herbarium, Tokyo Metropolitan University (MAK), and University of Tokyo (TI) for permitting to observe specimens.

References

- FUNAMOTO, T. and YUASA, H. 1986a. Cytogeography of *Sedum verticillatum* L. in Japan. Journ. Phytogeogr. Taxon. 34: 36-39. (In Japanese with English summary).
- and —. 1986b. Karyological studies on diploid species of the section *Telephium* of *Sedum* in Japan. Journ. Jap. Bot. 61: 365-371.
- MATSUMURA, J. 1912. Crassulaceae. In: Index Platarum Japonicarum, 2 (2): 165-170. Maruzen (In Japanese).
- MAXIMOWICZ, C. 1883. Crassulaceae, In: Diagnoses plantarum novarum asiaticarum, V. Bull. Acad. Sci. St.-Petersb. 29: 52-228 [119-158].
- OHBA, H. 1977. The taxonomic status of *Sedum Telephium* and its allied species (Crassulaceae). Bot. Mag. Tokyo 90: 41-56.
- . 1978. Generic and infrageneric classification of the Old World Sedoideae (Crassulaceae). Journ. Fac. Sci. Univ. Tokyo, Sec. III, 12: 139-198.
- OHWI, J. 1953. Crassulaceae. In: Flora of Japan,

585-592. Shibundo (In Japanese).

- . 1971. A new *Sedum* from Prov. Iwashiro. Journ. Jap. Bot. 46: 81-82. (With Japanese note).
- SOEDA, T. 1944. A cytological study on the genus *Sedum*, with remarks on the chromosome numbers of some related plants. Journ. Fac. Sci. Hokkaido Imp. Univ., Ser. V., 3: 221-231.
- UHL, C. H. and MORAN, R. 1972. Chromosomes of Crassulaceae from Japan and South Korea. Cytologia 37: 59-81.

摘 要

オオチチツパベンケイをチチツパベンケイの変種とした。オオチチツパベンケイは、1971年に大井次三郎によって福島県保原町雨乞山の標本により記載された種である。大井は、オオチチツパベンケイは植物体に乳頭状突起を密布し、葉が緑色となる点で、近縁種であるチチツパベンケイと異なると述べている。KYO, MAK, TI, TNSに所蔵されているチチツパベンケイの標本とオオチチツパベンケイのタイプ産地である雨乞山と茨城県大子町生瀬富士の2カ所で採集した材料を観察した結果、乳頭状突起を密布する以外の点では、チチツパベンケイとオオチチツパベンケイは区別できなかった。チチツパベンケイは、主に長野・新潟・山形・岩手・青森の山地と岩手県の海岸に分布し、オオチチツパベンケイは、阿武隈山地の上記2点のみに産し、地理的に隔離して分布している。またその染色体数は、雨乞山では $2n=24$ で生瀬富士では $2n=22$ であり、雨乞山の個体の染色体数は、報告されているチチツパベンケイの染色体数と一致し、生瀬富士の個体の染色体は、ミツパベンケイソウの2倍体の染色体数と一致する。

(Received December 14, 1989)

○ 正宗敬 日本の自生蘭, 写真と図 第6集 自己出版。平成2年4月10日発行。A4判, 92頁。15,000円。

既刊の各集と同様、カラー写真と線画で編集されていて、本集に所載の種類はスルガラン、ホソバシユンラン、カヤバシユンラン、カンラン、ナギラン、アキザキナギラン、ソシンラン、ヤマガワホウサイ、ショウキラン、キバナショウキラン、アコウネツタイラン、ヤクシマネツタイラン、ボウラン、リュウキウボウラン、オガサワラボウラン、タイワンボウラン、ヤクシマアカシユスラン、ツリシユスラン、アワチドリ、クロカミラン、アキザキヤツシロラン、トケンラン、ミヤマモジズリ、キヌラン、ムカゴソウ、ガンゼキラン、ヤマトキソウ、ヒメフタバラン、コウズエビネ、ヨウラクラン、クスクスヨウラクラン、カキラン、カゲロウランの33種である。私は発刊の度に思うことであるが、今回も本集を手にして、正宗先生には御高令にもかかわらず執筆を続けられているお姿に、敬服申し上げるばかりである。なお、益々御健勝でお過し遊ばされますよう、祈念申し上げます。

Table 1. Comparison of the new variety with var. *takaai*

Characters	var. <i>takaai</i>	new variety
Leaf blades	widely cordate to oval	oval-elliptical
Calyx lobes	ca. 0.7 mm thick	ca. 0.5 mm thick
Tube openings	4-6 mm across	3-4 mm across
Styles	as tall as calyx tube	not so tall as calyx tube
Florescence	February to March	July to October

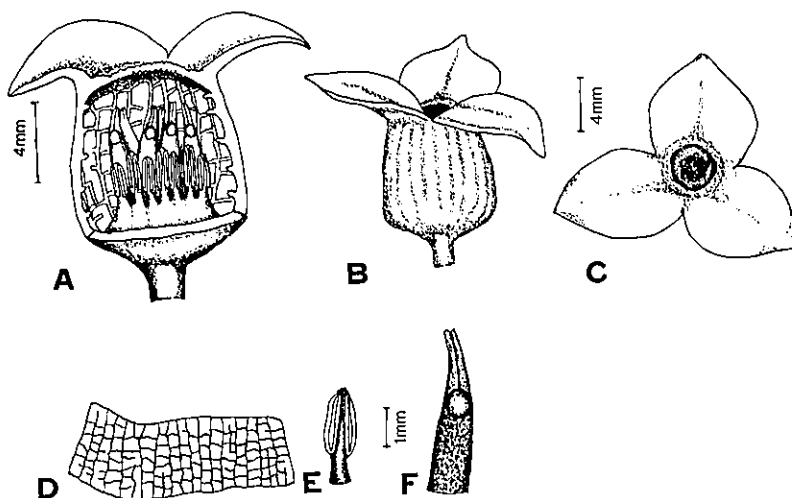


Fig. 2. Flower of *H. takaai* var. *austrokiensis*. A: inner view of flower; B·C: appearance of flower; D: netted upheaval of inner surface of calyx-tube; E: stamen; F: pistil.

アオイとは次の点で一見して判別できる。即ち、葉は卵状だ円形。萼は、開口部がより小さく、裂片がよりうすい。雌雄蕊柱の先端は開口部にふれることなく、ヒメカンアオイより低い。花期はヒメカンアオイの2~3月に対し、10月である。ただし、大塔山

のものは7、8月に咲く。本変種は和歌山県南部(紀南地方)各地に広く分布する。

最後に格別の御指導を賜った赤澤時之先生に厚く御礼申し上げます。

(Received November 4, 1989)

○ 我が国における保護上重要な植物種及び群落に関する研究委員会種分科会(編) 我が国における保護上重要な植物種の現状 日本自然保護協会および世界自然保護基金日本委員会。1989年11月発行。B5判320頁。

野生植物を遺伝資源の保護といった見地から絶滅から救おうという気運は、わが国でもようやく昂まりをみせ、環境庁もここ数年来この問題に力を入れ始めた。ようやくというのは、種の保全に関する提言はすでに1965年以前からわれわれが行って来たものだからである。市民サイドの声が行政レベルに反映されるための糸口を把むまでには実に長い時間がかかるものだと思う。ともかく、ようやく日の目をみた種の保全に関する問題点と保護の対象とすべき植物種(シダ・種子植物)のリストが、上記委員会(1986年4月発足)によって、赤い表紙の本にまとめられた。通称レッド・データブックである。ちなみに、イギリスのレッド・データブックは、1977年に発行されている。この本の基礎となった情報は大部分各都道府県在住の植物研究者から全く無償で寄せられたものであることはとくに強調しておかねばならない。

○ 岩槻邦男 日本絶滅危惧植物 海鳴社。1990年3月31日発行。B5判、227頁。1700円。

上記の種分科会の作業とほとんど平行して、1986年末に環境庁に野生生物保護対策検討会が設置され、すべての生物群について絶滅のおそれのある種のリストづくりが進められた。選ばれた種を国際自然保護連合(IUCN)の規準に照らし、絶滅種、絶滅危惧種、危急種、現状不明種にランクづけしたところ、895の維管束植物が浮かび上って来た。この本は、こうした日本における野生植物保護のための最近の活動や成果を紹介しながら、著者自身の自然保護観をのべたものである。(清水建美)

したがって、未分類系統は種子発芽の様式に関するかぎり、エゾスカシユリとみることができる。

このような傾向は、外部形態の類似性からも支持される(林・野田, 未発表)。すなわち未分類系統は、花被片の外葉や茎の上部の葉とその縁辺および花柄に白綿毛をもっている。また鱗片には明らかな関節がある。これらの形質は、いずれもエゾスカシユリを特徴づけるものである。

津軽海峡には生物の分布境界線の1つとして、ブラキストン線がひかれていることは、古くからよく知られている。しかしこれはおもに哺乳類の地理的分布から設定されたものである。一方、植物では現在の気象とも関連した地史的要素が働いていて、かならずしもこの線でわりきることはできない(堀田, 1974)。本州北部までエゾスカシユリが南下しているか否かはスカシユリ類の亜種分化に直接関係のある重要な課題である。種子の発芽様式から、そのような可能性が強く示唆されたが、他のいろいろな形質によってもさらに検討する必要がある。

この研究を進めるにあたって、終始ご指導と原稿の校閲をいただいた本学野田昭三先生に深謝する。また貴重なご教示と助言をうけた清水基夫先生、鈴木昌友教授(茨城大学)、河野昭一教授(京都大学)に謝意を表わす。津軽・下北地方における1986年の調査は、野田昭三先生とともに羽多江久吉、小林範士(弘前市役所)、高谷泰三郎(青森県東奥義塾高校)、羽根井良江(誠文堂新光社)の各氏の案内と助言をうけて行った。さらにその他の地点における材料の収集にあたって、新井博仁(北海道平取高校)、松尾和人(北海道大学)および篠田朗彦(神奈川県大船植物園)の3氏にたいへんお世話になった。あわせて感謝する。終りにこの研究にお力添えをいただいた本学白井善康総長に深くお礼を申しあげる。

引用文献

- BARANOVA, M. V. 1977. Special seed germination modes and the development of seedlings in lilies. Yearb. North Am. Lily Soc. 30: 26-34.
 —. 1987. The structure and development of Lilies. Yearb. North Am. Lily Soc. 40: 87-96.

COMBER, H. F. 1949. A new classification of the genus *Lilium*. R. H. S. Lily Year Book 13: 85-105.

- 原 寛. 1963. ヤマスカシユリ. 植物研究雑誌. 38: 248-249.
 堀田 満. 1974. 植物の分布と分化. 「植物の進化生物学 III」, 400 pp. 三省堂, 東京.
 HULTÉN, E. 1927. Flora of Kamtchatka and the adjacent islands. I. K. Sv. Vet. Akad. Ser. 3, Bl. 5, 346pp.
 大井次三郎(北川政夫改訂). 1983. 新日本植物誌. 顕花編. 1716 pp. 至文堂, 東京.
 奥山春季. 1981. 原色日本野外植物図譜. 1. 518 pp. 誠文堂新光社, 東京.
 —. 1982. 原色日本野外植物図譜. 2. 589 pp. 誠文堂新光社, 東京.
 佐竹義輔. 1982. 日本の野外植物. 草本. (佐竹義輔・大井次三郎・北村四郎・亘理俊次・富成忠夫編) 305 pp. 平凡社, 東京.
 清水基夫. 1971. 日本のユリ. 376 pp. 誠文堂新光社, 東京.
 —. 1987. 7. エゾスカシ(蝦夷透)ユリ *Lilium dauricum* KER-GAWL.(1809)と野生スカシユリ類 *L. maculatum* THUNB.(1794). 清水基夫編「日本のユリ 原種とその園芸種」: 75-79. 誠文堂新光社, 東京.
 鈴木昌友. 1970. 茨城の植物. 490 pp. 茨城新聞社, 水戸.
 —. 1975. スカシユリ類の形質の比較. 日本植物分類学会報. 3: 21-22.
 —. 1979. 日本産野生スカシユリ類の形質の比較. 日本植物学会第44回大会研究発表記録(広島): 199.
 —. 1980. 新潟県佐渡に見られる自生スカシユリの形質. 日本植物学会第45回大会研究発表記録(仙台): 53.
 WOODCOCK, H. B. D. and STEARN, W. T. 1950. Lilies of the World. Their Cultivation and Classification. 431pp. Country Life, London.
 (Received October 26, 1989)

○ 池上義信(監修)・石沢 直(編集)新潟県植物分布図集 第10集 植物同好じねんじょ会(新潟県小千谷市山寺 関 省吾方), 平成元年12月25日発行。A4判, 563頁。頒価(〒別)6000円。

植物同好じねんじょ会が10年前から1年1冊のペースで確実に出版を続けて来た本分布図集の最終版が届けられた。本号にはNo877のイワビバからNo1000のイヌマムカゴまでの124種の分布図のほかに「新潟県植物分布資料(9)」「新潟県における植物分布の類型(10)」「新潟県植物短報4」「十日町のシダ植物」「苗場山の植物 分布資料I」「離島の植物9」その他2篇の記事がある。この第10集が出たことで新潟県産の維管束植物ちょうど1000種の詳細な分布図が発表されたわけで、他県に類例をみない大仕事が終了した。引き続き、今度は小型判の分布図出版の計画があるという。第3集以降はまだ残部があるので、入手希望者は発行者あて照会されたい。(清水建美)

- Vol. II. British Museum, London, p. 9.
 KIRTIKAR, K.R., BASU, B.D. and AN, I.C.S. 1903.
 Indian medicinal plants, Vol. 1, 2nd ed., Lalit
 Mophan Basu, Allahabad, India.
 NADKARNI, K.M. 1954. Indian Materia Medica,
 Vol. 1. Third Ed. Popular Book Depot.,
 Bombay, pp. 23, 25.
 NAMBA, T., 1980. Coloured illustrations of
 Wakan-yaku, Vol. 1. Hoikusha, Osaka, p. 92.

摘 要

ネパールにおける伝統医療はアーユルヴェーダ（インド医学）に依っている。同医学で使用される薬物の一種に Nirbisi あるいは Nirmashi と称されるものがあり、解毒薬として古くから用いられ、その基源はキンポウゲ科の *Delphinium* 属植物の地下部であるとされてきた。しかし、今回ネパールの各地生薬市場で入手した Nirbisi は、その外形から同科の *Aconitum*（トリカブト）属植物の塊根であると思われ、解剖学的にもよく一致した。

一方、ネパールには 30 種以上のトリカブト属植物が分布しており、その多くが民間薬として利用されていると考えられるが、生薬学的な研究はきわめて少ない。今回ネパール中部で採集することが出来た *A. orochryseum* の内部形態の詳細については未記載であったので、その母根および子根の内部形態を検討し、市場品と比較したところ、2カ所の市場品が本種に一致した。それ以外の市場品も明らかにトリカブト属植物であったが、種のレベルで異なるものであった。トリカブト属植物の内部形態に関する過去の報告内容が断片的であるため、今回の不明種については十分な対比が行えず、それらの基源については今後の問題とした。

いずれにせよ、ネパール産の Nirbisi あるいは Nirmashi と称される生薬は、従来云われてきた *Delphinium* 属ではなく、トリカブト属植物の塊根であり、それには *A. orochryseum* も利用されていることが本研究で明らかになった。

(Received December 15, 1989)

○ 照葉樹林にフウリンゴケ見つかる（土永浩史） Hiroshi DOEI: *Bartramiopsis lescurii* (JAMES) KINDB. Found in the Lucidophyllous Forest in Wakayama Prefecture

フウリンゴケはスギゴケ科に属する蘚類で本邦産 1 属 1 種である。本種は茎が細長く、葉鞘部に数本の長い多細胞の毛をもつことで、胞子体がなくとも他の種と容易に区別することができる。蒴があれば、蒴歯をもたないことも大きな特徴とされる。国外ではカムチャッカ、シベリア、北米に分布し、日本では北海道から九州の亜高山から冷温帯にかけて生育している。近畿地方では大台ヶ原・大峰山のほかには知られていなかった。

1989年9月10日、和歌山県西牟婁郡大塔村前ノ川国有林において本種を見出したので記録しておく。生育地は日置川の上流、大塔村木守から東に入った大塔山の山麓にあたる前ノ川の標高約 560 m の地点である。溪流沿いの岩壁にみられ、岩の割れ目などに数個のマットを形成していた。胞子体は見られなかった。この谷底にはタチハイゴケ *Pleurozium schureberi* (BRID.) MITT. やオヤコゴケ *Lophozia cornuta* (STEPH.) HATT. などの亜高山生の蘚苔類も見られ、植物地理学的に非常に興味ある地域である。

本種は通常は亜高山の針葉樹林帯から冷温帯の落葉広葉樹林帯にかけて見られる種で、本地域のようにウラジロガシ、アカガシ、ツクバネガシを主体とした照葉樹林に生育している例はないのではないと思われる。この周辺地域の塔山系では高等植物においてもヒメイワカガミが標高約 300 m まで下降しているなど北方系の種と南方系の種が混在して見られ、複雑なフロラを示している。しかし残念なことにこの前ノ川国有林は現在伐採中で無残な姿をさらしている。なんとかこの貴重な地域を保護する手だてはないものかと考える。

Specimen examined. Honshu, Wakayama Pref., Nishimuro-gun, Ohto-mura, Maenokawa National Forest, ca. 560 m alt., on wet rock near stream, Sept. 10. 1989. H. DOEI no. 12037.

(〒 648 橋本市古佐田 和歌山県立橋本高等学校 Wakayama Prefectural Hashimoto Senior High School, Kosada, Hashimoto 648)

○ 根井正利 分子進化遺伝学 平成 2 年 2 月 5 日発行。A 5 判, 433 頁, 培風館発行。定価 7910 円。

本書は、1987 年に出版された *Molecular Evolutionary Genetics* (Columbia University Press) の日本語版である。分類学者にとって、特に参考となるのは、第 11 章(系統樹)の部分であろう。私を含め、日本の一般的な分類学者のこの分野に対する知識といえば、“アミノ酸と塩基の置換速度は近似的に一定であり、系統樹の作成の優れた道具となる”という基本的な枠を出ないものではないかと思う。分子情報から系統を構築するにあたり、どのような系統作成法があり、各方法はどのようなケースに最も適しているかといった最新の知識は、

いままで良い参考書がなかったこともあり、簡単に手に入れる事ができないものであった。きめ細かい各系統作成法の評価は、着実にこの分野が進歩していることを納得させてくれる。学問の性質上、数式が多く、熟読はとても疲れるが、正確なこの分野の知識を得るにはいい本ではないかと思う。(綿野泰行)

○ 広島県世羅台地の湿原植物についての追加と訂正 (下田路子*・実光紀之**・吉野由紀夫*) Michiko SHIMODA*, Noriyuki SANEMITSU** and Yukio YOSHINO*: Addition and Correction to the Marsh Flora of the Sera Plateau, Hiroshima Prefecture, Western Japan

著者らは広島県世羅台地の湿原に生育する稀少植物数種の分布と生育状況について報告した(下田ほか, 1989)が、その後の調査により以下のような追加・訂正すべき点が生じたので報告する。

1. ヤチシャジン

著者らが報告した世羅郡世羅町にあるヤチシャジン *Adenophora palustris* KOMAR.の生育地は牧場の建設予定地内にあり、この生育地を保存することは残念ながら不可能である。しかし著者の一人実光は1988年9月に、上記の生育地の西方約1kmの所にある、山間の小さな湿地にも本種が生育しているのを確認した。

標高480mのこの湿地は、ミカワシオガマ *Pedicularis resupinata* LINN. var. *microphylla* HONDAが生育する湿原の上方の、アカマツ林に囲まれた谷にある。ここでは高さ約5mのネズ、アカマツや、約1.5mのイヌツゲ、ウメモドキ、アセビ、ミヤコイバラなどの木本類が優占している。また草本層の主な種はシシガシラ、ヌマガヤ、マアザミ、ヤマドリゼンマイ、ススキなどで、ヤチシャジンもこれらの種にまじってまばらに生育していた。この湿地も牧場の建設予定地に近いが、今のところ開発の予定はない。昨年(1989年)実光と中島秀也氏が、開発が予定されている湿原のヤチシャジンを数株、この谷に移植してみたところ、現在まで生育状態は良好である。そこで湿原が破壊される前に、残りの株も移植する計画である。なお、中国地方におけるヤチシャジンの分布に関する文献で前報にもれていたものに、北村(1936)と田代(1973)の報告がある。

2. コアナミズゴケ

前報で、コアナミズゴケ *Sphagnum microporum* WARNST. ex CARD.は世羅郡甲山町の湿原だけに見られたとのべた。しかし1989年8月の調査で、ミカワシオガマ、ミコシギク、ヤチシャジンが生育する世羅町の湿原にも、過湿な立地にコアナミズゴケが生育していることに気づいた。また関太郎博士にも現地でコアナミズゴケと確認していただいた。著者の一人下田は1988年11月に、ミズゴケ類の分類の専門家である鈴木兵二博士が、世羅町の西隣の賀茂郡大和町津久の山間に散在する湿原(標高約450m)を調査されるのに同行した。ここでもコアナミズゴケが、過湿地や水中に多量に生育していた。

SUZUKI (1972)は、ミズゴケ類の種の組み合わせにより日本の湿原を分類し、この中で「オオミズゴケ-コアナミズゴケの組み合わせ」(*Palustre-microporum* combination)を持つ湿原のタイプを報告している。上記の世羅台地の湿原では、周辺部にオオミズゴケ *Sphagnum palustre* LINN.が、また過湿地にコアナミズゴケが生育しているので、これらの湿原は上記のタイプに属するものと見なすことができる。

3. ノウルシとナツトウダイ

前報で、2個所の湿原に生育したトウダイグサ科の植物を、湿地生であることからノウルシ *Euphorbia adenochlora* MORREN et DECNE.としていたが、1989年5月に、中島秀也氏に花をつけた標本を採集していただき、関太郎博士に同定願ったところ、これはナツトウダイ *E. sieboldiana* MORR. et DECNE.であった。よって前報のノウルシ(下田ほか, 1989; p.10, 右上から2行目; p.11, 左最下行)をナツトウダイと訂正する。

多くの貴重な助言をいただいた鈴木兵二博士・関太郎博士、野外調査にご協力いただいた中島秀也氏に厚くお礼申し上げたい。

引用文献

北村四郎. 1936. 邦産ツリガネニンジンの数種に就いて. 植物分類地理 5: 204-210.

下田路子・実光紀之・吉野由紀夫. 1989. 分布上興味深い広島県世羅台地の湿原植物—ミカワシオガマの新産地など—. 植物地理・分類研究 37: 9-14.

SUZUKI, H. 1972. Distribution of *Sphagnum* species in Japan and an attempt to classify the moors basing on their combination. Journ. Hattori Bot. Lab. 35: 3-24.

田代晃二(編). 1973. 田代善太郎日記, 昭和篇. 880 pp. 創元社, 大阪.

(*〒730 広島市中区東千田町1-1-89 広島大学理学部植物学教室 Botanical Institute, Faculty of Science, Hiroshima University, Higashi-senda, Naka-ku, Hiroshima 730, Japan; **〒729-33 広島県世羅郡甲山町青近445 Aochika 445 Kōzanchō, Sera-gun, Hiroshima-ken 729-33, Japan)

- 11: 9-18.
- 水谷正美, 1962. 富士青木ケ原の林床蘚苔類群落について. 服部研究所報告 25: 253-262.
- 中西 哲, 1959. 風穴で見られる蘚苔類の異常分布. 植物研究雑誌 34: 19-22.
- 日本積雪連合, 1974. 豪雪地帯における雪寒メッシュマップ調査.
- , 1976. 豪雪地帯における年最大積雪深, 積雪日数, 年最大降雪量の4 km メッシュマップ作成に関する研究. 雪の基礎資料 No.7, (財)日本積雪連合資料 No.125.
- OSADA, T. 1966. Japanese Polytrichaceae. II. The Genera *Polytrichum*, *Oligotrichum*, *Bartramioopsis* and *Atrichum* and Phytogeography. Journ. Hattori Bot. Lab. 29: 1-52.
- 佐々木洋, 1984. 風穴植物群落の分布と環境. 筑波大学大学院環境科学研究科修士論文 19pp.
- 佐野実, 1963. 風穴植物の生態(I), 福島県南会津郡下郷町地内中山の風穴と風穴植物群落の調査. 第二報. 福島生物 6: 29-35.
- 志保井利夫, 1974. 北海道常呂郡留辺蕊町温根湯つつじ山の風穴について. 地学雑誌 83: 25-38.
- 白崎 仁 1984. エビゴケの生態分布. 植物地理・分類研究. 32: 59-67.
- , 1985. ニスピキカヤゴケとケクラマゴケモドキ(苔類)の生態分布. 植物地理・分類研究. 33: 82-95.
- , 1989. オオシラガゴケとヒノキゴケ(蘚類)の生態分布. 植物地理・分類研究. 32: 15-25.
- 高橋祥祐・藤原陸夫 1979 a. 鞍山風穴の植生. 自然環境保全地域等調査報告書. 1-20, 秋田県.
- , 1979 b. 小又風穴の植生. 自然環境保全地域等調査報告書. 33-47, 秋田県.

(Received July 13, 1989)

○ E. J. H コーナー著 大場秀章・能城修一訳, 植物の起源と進化 八坂書房 1989年12月15日発行. B5判, 340頁, 4800円.

本書は第1回国際生物学賞を受賞した E.J.H. Corner の名著 *The Life of Plants* (Univ. Chicago Press, 1964) の訳本である。序文, 15章からなる本文と用語の解説, 原注, 原著参考文献, 索引がもともとの部分の訳で, それに日本語版への序文, 訳者のあとがきがついている。本文は6章までが海藻, 次の6章が陸上植物, 2章が菌類, そして最後の1章がまとめとも言うべき「森の彼方へ」という思索に満ちた章である。原題が「植物の生活」とあるように, 海藻, 陸上植物, 菌類(実はこの菌類も緑色植物とは異なった方向に進化した「陸上植物」であることを教えてくれている)の3者の生活を, 環境に対する適応と植物の進化の面から説き語っている。我々の興味が集まるのはもちろん陸上植物の各章だが, その中でも特に, 植物体は太い茎と大形の葉を少数持つ「肥厚茎型」から細い茎と小さな葉をたくさん持つ「瘦身茎型」へ進化し, それと独立にはあるが, 大きくて色鮮やかな種衣をもち裂開するドリアン型の果実から他の果実が進化したという「ドリアン理論」が圧巻である。

これらのコーナーの考えは従来の常識的な系統分類学や系統進化学とは全く異なった出発点から導かれており, それらのもっとも弱点である, 「生活を通しての進化」という視点が貫かれている。それは著者のシンガポール植物園での勤務を始め, 多年にわたる熱帯での植物の観察を通して築き上げられてきたもので, 我々温帯の植物ばかりを相手にしているものにとっては得難い視点である。この本は, 従来の植物学の教科書とは打って変わって, 図が比較的少なく, それとは逆に植物の生活を示す大きな写真, そして花と果実については鮮やかな彩色画を付け, その特徴を余すことなく示している。それにしても訳文を拝見する限りでは原著の文章が難解で, 訳出にさぞかし苦労されたことが伺えるが, 訳者としてもやりがいがあったのではないかと思う。植物学の教科書としてばかりでなく, 植物の世界へ誘う「読み物」としても大いにお奨めできる。

○ 文部省・日本植物学会著 学術用語集 植物学編 丸善. 1990年3月20日発行. 7+684 pp. 2781円。

1983年に特定研究「植物学用語標準化の調査研究」として日本植物学会が取り組んで以来, 7年目にしてようやく発行された。これはあくまでも1956年発行の, 植物を勉強しようという大学生にとっては殆ど役に立たなかったあの用語集の, あくまでも増補訂正版の形をとっているが, 内容的には全く一新されている。形式は旧版とほぼ同じで, 第1部にローマ字表記と日本語表記による和英, 第2部に英和, 参考として植物の科名のabc順による標準和名対照表, それにこの本の発行に関わる資料となっている。

旧版に比べ収録用語数で約5倍となっている。内容が豊富になった背景にはこの間の植物学及び植物科学の発展が大きい, 旧版より収録の目安のレベルを大学生程度に引き上げたこともある。これでちょっとした英語の教科書を読むのに用語が全く出て無くて苦労する, ということは大幅に緩和されよう。また, この間に国語審議会などの方針の変更もあって, 以前には許されなかったむずかしい漢字などの使用が一部緩和され, 意味の通じる「用語」に戻ったものなどもあり, たいへん役に立つようになっている。ただ残念なことは, これ

は文部省が絡めばどうしようもないことだが、ローマ字表記がいわゆる文部省式であるため、最近のワープロや英語表記になれた人にはなかなか目的の単語を見つけられない恨みがある。なお、日本植物学会員は著者割引で入手できるとのことが、本書発行に大変苦勞された金井弘夫氏による紹介記事として最近の生物科学ニュース(1990年4月号)に載っていた。(鈴木三男)

○ 男女群島産ハママンネングサの花弁の数と花期について(伊藤秀三*・中西弘樹**) Syuzo ITOW* and Hiroki NAKANISHI** : On the Number of Petals and Flowering Season of *Sedum formosanum* N. E. BR. in the Danjo Islands, Nagasaki.

男女群島に産するマンネングサ属の1種は、全体の形および種子で繁殖することから、一応ハママンネングサと同定される。しかし、花弁の数と花期がこれまでの記載と異なるので報告しておくたい。これを最初に注目したのは長崎県北陽台高校の江島正郎(私信, 1987)であり、彼が採集したものを筆者の一人中西が栽培していた。これとは別に伊藤は1989年秋に男女群島を訪れ、その特徴に気づき、採集している。

マンネングサ属(*Sedum*)植物の花は5数性で、ハママンネングサについても花弁が5、心皮が5であることが知られている(大井, 1965など)。例えば佐竹ほか(1982)の奄美大島産のもの、池原(1979)の沖縄産のもの写真を見ても花弁が5であることがわかる。しかし、男女群島のものはいずれも花弁4、心皮4、雄蕊8であり(図1)、これまで報告されているものと異なる。ただ、初島・中島(1979)の与那国島産のもの写真を見ると花弁は6であり、今後各地のものについて調べてみる必要がある。

一方、花期については奥山(1960)が6~7月としており、花の写真は沖縄で4月(池原, 1979)、奄美大島産のものが5月(佐竹ほか, 1982)となっており、春から初夏であることがわかる。しかし、男女群島のは10月上旬から11月上旬に咲き、この性質は栽培していても変わらず、はっきりしている。この違いはかなり重要な特徴と考えられ、男女群島産のものについて分類学的な取り扱いを検討する必要がある。

引用文献

池原直樹. 1979. 沖縄植物野外活用図鑑, 第4巻, 303 pp. 新星図書出版, 沖縄.

奥山春季. 1960. 原色日本野外植物図譜2, 176+18 pp. 誠文堂新光社, 東京.

大井次三郎. 1965. 日本植物誌, 顕花編, 1560 pp. 至文堂, 東京.

佐竹義輔・大井次三郎・北村四郎・亘理俊次・富成忠夫. 1982. 日本の野生植物II, 318 pp. 平凡社, 東京.

(*〒852 長崎市文教町1-1-89, 長崎大学教養部生物学教室 Botanical Institute, Faculty of Liberal Arts, Nagasaki University, Bunkyo-machi, Nagasaki-shi, Nagasaki 852; **〒850 長崎市弥生町666 長崎女子短期大学 Nagasaki Women's Junior College, Yayoi-machi 666, Nagasaki 850)



図1 ハママンネングサ(男女群島女島, 1989年10月3日伊藤秀三撮影)

文前期を主とする低湿地遺跡の調査4」：9-42、福井県教育委員会・福井県立若狭歴史民俗資料館、島地 謙・林 昭三、1988、古殿遺跡出土製品の樹種、「京都府遺跡調査報告書第9冊」：98-105、京都府埋蔵文化財調査研究センター。
鈴木三男・能城修一、1988、田名遺跡出土土製品の樹種の調査結果について、「田名遺跡」：56-70、福井県三方町教育委員会。
高原 光・伊藤孝美・竹岡政治、1988、約3,000年前のスギカミキリ被害材と当時の森林環境、日本

林学会誌 70 : 143-150。
高原 光・竹岡政治、1987、丹後半島乗原周辺における森林変遷—特にスギ林の変遷について、日本林学会誌 69 : 215-220。
田辺常博、1988、田名遺跡の立地と周辺の遺跡、「田名遺跡」：1-3、福井県三方町教育委員会。
安田喜憲、1979、花粉分析、「鳥浜貝塚—縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査1」：176-196、福井県教育委員会。(Received Dec. 15, 1989)

○ 伊東 博さんのご逝去を悼む (黒沢美房) Yoshifusa KUROSAWA : Obituary of the Late Mr. Hiroshi ITO

本誌が「北陸の植物」であった時からの会員の伊東博さんが、平成元年3月26日、浜松市の自宅にてご逝去されました。81歳でした。自然を愛し、お庭にいろいろの植物を栽培してあったから、まだまだ研究を続けるつもりであったろうに残念です。謹んで哀悼の意を表します。

お生まれは浜松市で、浜松一中(現在浜松北高)をご卒業になり、北海道大学をご卒業後、静岡県東部の旧制中学校の理科の教職に就かれました。その後、当時日本の領土であった台湾にて、台北の公立中学校の教師、台北大学の講師等をなされました。終戦で日本に帰られ静岡県西部の浜松農業高校、磐田農業高校、天竜林業高校に勤務され、退職後は悠々自適の生活をされておりました。

私は磐田農高の隣りの磐田南高の生物の教師をしていたので、親しくしていただくようになりました。或日、突然私の教室に來られ、台湾で採ったヤブレガサウラボシを誰かに貸してやるのだと、ついでに私にも見せて下さいました。私はその珍品の印象と、伊東さんのうれしそうなお顔がいまだに忘れられません。その他にも台湾産のシダの標本を相当持っていると話しておりましたから、あちらでも可成り歩き廻ったことでしょう。

静岡県理科教育西部支部では、「遠州生物」という会員雑誌を出版したことがあり、その創刊号(昭和29年3月発行)では伊東さんは「四ツ池、一ツ池附近の植物について」という論文で、浜松市内の湿地の珍しい植物、キリガミネトウヒレン、ミカワバイケイソウ、ミカワシオガマ、ピロウドノリウツギ等の分布を記録されております。第2号(昭和34年3月発行)では2編発表され、「白倉峽の植物」では秋葉ダム附近の峽谷のエンシュウシャクナゲ、アカヤシオ、カインンサラサドウダン其他の分布を記しておられ、もう一方の「新変種キバナハナネコノメソウに就いて」では、本人が採集されたハナネコノメソウの変種キバナハナネコノメソウの標本が、タイプ標本になったことを書いております。

静岡県湖西市神座のトキワマンサクの群生地(静岡県が日本の北限)が、県の天然記念物に指定保護されておりますが、この実現に伊東さんが一役加わったということを知っております。遠州の植物に詳しい伊東さんを失い残念でなりません。御功績を思い出しながら、心から御冥福をお祈りいたします。

○ 小倉洋志、久保田秀夫、田代俊夫、加藤 仁、杉田勇治、伊東 徹、神山隆之、鈴木文益、野口達也、桜井雅幸、吉川 誠、山村 剛共著 八溝山地の植物相(栃木県立博物館研究報告書、第7号、八溝の自然3)。栃木県立博物館、平成元年3月31日発行。B5判、448+8(写真)頁。非買品。

八溝山地は関東地方北東部に位置し、主として栃木県と茨城県の県境を南北に走る全長約100kmの山地で、その北端部に主峰八溝山(1,022m)、南端に筑波山(875m)がある。

この地域の植物相に関する報告は1940年代より多数あるが、断片的なものに留っていた。本書は上記のように多数の方々の協力によって、八溝山地の植物の組成と特徴を解明することを目的に、八溝山塊から雞足山塊に至る八溝山地中・北部の維管束植物を対象に、1982年以来行って来た調査のまとめとして出版されたものである。内容はI 緒言、II 気候、III 主要調査地とその植生、IV 八溝山地産維管束植物目録、V 特記すべき植物、VI 八溝山地の植物相の構成、VII 考察、VIII 摘要となっている。

○ 小国生物友の会 小国の植物 平成元年8月31日発行。A5判、248頁。売価不詳。

小国町は新潟県のほぼ中程にある盆地で、積雪量が多い。最高峰でさえ500m余に過ぎないから、所産の種類はおよそ800位である。本書はこの中より選ばれた500種のカラー写真を、しだ、木、春(草)、夏(草)、秋(草)の5項目にわけて編集されている。(里見 信生)